

特集2／令和2年度千葉大学法政経学部公開講座

幸福と公共性——コロナ後の社会を展望しつつ

千葉大学大学院社会科学研究院教授

小林 正弥

本稿は、2021年1月15日にオンライン開催された、令和2年度千葉大学法政経学部公開講座の記録です。(編集部)

小林でございます。初めてのオンラインの講演ですので、私も少し緊張をしています。実は昨年度も私がこの公開講座でお話をする事になっていたのですが、災害(台風)によって中止となり、代わりに今年度に行うことになったのですが、このような状況なのでオンラインで行うことになりました。

「幸福」と「公共性」

そこで今日は、昨年度用意したスライドを状況に合わせて改訂してお話しします。幸福と公共性というテーマは、今の私の大きな2つの研究主題です。知っておられる方もいるでしょうが、私はマイケル・サンデルの「ハーバード白熱教室」の紹介やそういった形式の対話型講義をしています。千葉大学でも学生向けにそのような講義を行っておりまして、今年度はオンライン講義ながら、学生の投稿になるべく応答しながら進めています。スライドには2冊の本を写しています。片方は、2010年出版で、ハーバード白熱教室の流れの代表的な本として『サンデルの政治哲学』(平凡社新書)です。これが公共性に深く関係しており、私は政治哲学の中のコミュニタリアニズムという考え方を特に研究しています。

もうひとつは、『ポジティブ心理学——科学的メンタルウェルネス入門』(講談社選書メチエ)という本で、つい最近刊行されたところです。これは「幸福」

というテーマと密接に関係しているのですが、今日はこのテーマにも触れながら、この2つがどういう関係にあるのかという話をしてみたいと思っています。

「公」と「私」そして「公共性」

では、初めに公共性に関してですが、私は公共哲学を研究しておりまして、千葉大学の大学院（人文公共学府）で社会科学では公共研究が大きな軸となっています。公共という概念はどのようなものか、というのが公共哲学のいちばん基本的な問題意識です。公と私、そしてその関係における公共とは、何なのだろうかということです。

今日の様々な問題を考えてみますときに、公共性が大きく衰退・縮小しているのではないか、それはもう一度活性化すべきではないのか——これが、公共哲学のいちばん基本的な問題意識です。たとえば最近の政治を考えてみても、世界的にポピュリズムが勃興して、民主主義にとって大きな危機が訪れているということが数年前から強く言われていました。たとえば世界の民主主義の中心国と言われていたアメリカで、トランプ政権が誕生しました。イギリスでもボリス・ジョンソン政権という EU 脱退を推進する政権が成立し、フランスやドイツにおいてすら極右が一定の政治的な勢力になってきました。みなさんもご存知のようにトランプ政権は昨年 11 月に大統領選挙で敗北したのですが、トランプ氏は当初それを認めようとせずに、支持者を煽って、熱烈な支持者が、ごく最近、連邦議会で大統領を選出するプロセスを妨害するために占拠し、死者が出るという事態になりました。これは、クーデターとか内乱のような大事件を連想させるような深刻な事態で、アメリカでこういうことが起こるのかと驚いた人も少なくないだろうと思います。

1974 年から 1990 年代にかけて、世界中で民主主義の「第三の波」(S・ハンチントン)が生じたと言われていたのですが、今は逆に民主主義の危機や衰退が目立っています。旧ソ連圏から始まって、アジア、さらには日本も含めて、形式的には選挙が行われているけれども、実際には権威主義的になっているのではないかという疑いがさまざまな国で持たれるようになり、そういった政治体

制を競争的権威主義あるいは新権威主義と比較政治では分類しています¹。

日本でも前の安倍政権で森友・加計学園、そして桜を見る会など、さまざまな問題で疑惑が生じて、政治の私物化と批判されました。また、議会が非常に弱体化して、強行採決が繰り返し行われるとか、実際に議論がなされる時間数が大きく減り、議論も形骸化しているわけです。ですから日本でも、権威主義化が進んでいるのではないかという議論が生じています。政治や法律において極めて重要な自由の問題に関しても、2019年のあいちトリエンナーレ問題で、明確なかたちで自由への圧力が見られましたし、現・菅政権でも学術会議の任命拒否問題が起っています。こういったことは民主主義の形骸化や衰退、あるいはそれに伴う自由と公共性の縮小を感じさせる事件です。

新型コロナと政治哲学

今もっとも深刻で多くの人たちがいちばんの問題関心を持っているのは、もちろん新型コロナウイルス感染症で、この対策にも各政権の思想・哲学が如実に表れています。たとえば、今言ったようなポピュリズム政権の中には、思想的にはリバタリアニズムないしネオ・リベラリズムの主張をしている政権が多く、たとえばアメリカ大統領やイギリス首相、ブラジル大統領（ジャイナル・ボルソナーロ）はそういった観点から経済重視の反面としてコロナ対策を軽視して失敗し、そして実際に3人とも自ら感染もしたわけです。イギリスのジョンソン首相は入院して一時は深刻な状況になり、退院してから考え方を変えました。やはりどういう政治思想・政治哲学に依拠する政権かということは、コロナ対策をどこまで有効に行えるかということにも影響しているわけです。

日本の場合は政権がオリンピックをなんとしても行いたいという強い願いを持っていて、検査抑制論が横行し、検査や隔離の体制が不十分で、医療システムの支援が不足しています。政権主導で「with コロナ」という標語が使われて、Go To トラベルや、Go To イートという政策が行われました。批判する側から

¹ これについては、本号掲載の大澤傑・小林正弥「動態的な恩顧主義的政治体制論」184頁参照。

は、コロナ感染症への対策がなおざりで、これらの政策を通じて全国に蔓延するのではないかという危惧が指摘されていたわけですが、現に第3波が激しく年末から起こってきて、年明けから2度目の緊急事態宣言という事態になっています。初めの段階では、西洋諸国は極めて深刻であったのに対して、アジアはそれに比べると被害が少ないと言われていましたが、日本はもともとアジアの中では、やはり人口比の感染者数が大きかった方でした。今それがどんどん増えてきているという状況で、このまま行ってしまうとアジア最悪の失敗国の一つになりかねない状況です。

そういったことの原因はやはり政権の政治哲学あるいは、そういった政治体制の問題にあるのではないか。こう考えてみると、改めて公共性あるいは公共哲学が大事なことがわかつています。

公共哲学の学際性・対話性

では、公共哲学とはどういうものなのかということをごく簡単にお話ししましょう。私たちは政治学や経済学、社会学といったような個別の学問だけで大きな問題を考えることはできないので、それらが協働して学際的な研究を行う必要がある。そしてまた世界の大きな問題に対して、真剣に取り組むという実践性が必要である。そして実際にそれを遂行するためには研究者間の対話と同時に、研究者と市民の間の対話、そして市民同士の対話を活性化してゆく必要がある。このように、学際性・実践性・対話性が公共哲学の特色です。

今の世界では哲学と科学が分断されていて、大学でも思想史研究者・思想研究者と実証的研究者との間には大きな溝があるわけですが、私たちはそういった壁を越えて協力して学問を展開しようとしています。

公共哲学という言葉は「公共」と「哲学」からなります。「哲学」といえば西洋ではソクラテスが原点だとよく言われるわけですが、マイケル・サンデルの講義がどうして大きなインパクトを持ったかと言いますと、ソクラテスが「愛知の学（哲学）」の原点において行ったような、問答法を大講義で再現したからだと思っています。

もう一つの「公共」が意味しているのは、第1に、公共という概念を軸としながら、何らかの公共性の実現が望ましいとするという思想である、ということです。第2に、公共的な特質を持つ哲学だということです。学問的な公共哲学もあるのですが、それだけではなくて、人々が広く共有し、行動や政策の指針となるような公共的な考え方という意味があるのです。たとえばアメリカの歴代大統領が大統領就任演説で示すような政権の基本的な考え方は、政権の公共哲学と呼ばれることがあるわけです。

「公」と「公共」の違い

では、公と公共でどういうことを考えているのか。日本では昔から「お上に従う」という姿勢があり、公と官と国家が非常に近い関係にあった。だから公共と言いながら実はお上である官や国家のことを意味していて、それに従うというスタンスが強かったわけです。これに対してあえて「公」と区別して「公共」という言葉を使うときには、より水平的な関係を重視して、対等な人々の形作る公共を考えます。つまり、昔で言えば幕府のご公儀などに由来するような、国家的な公（おおやけ）に対して、人々が民として作ってゆくのが公共と区別するわけです。英語の **public**、たとえば **public opinion**（公論）にはこのような水平的な「公共」のイメージが強いのです。

思想史的には、ドイツのユルゲン・ハーバマスという哲学者が『公共性の構造転換』（原著 1962 年）という有名な本を書いてから、こういった市民的な公共性が注目されるようになりました。それによれば、近代の民主主義の成立においては、サロンやコーヒーハウス、活字のメディアなどが公共空間を作り、まずは文芸の議論から始まって政治的な議論へと展開しました。公共圏が政治に影響を与えてゆくというプロセスが議会の確立に繋がっていきました。ところが、20 世紀になると公共圏が逆に形骸化して、行政国家化という現象が生じたということです。それをどうやって再び復興するかというのが公共哲学の大きな問題意識になっているわけです。

ただし「公共」という概念は、「共同」という言葉と似ていますが、若干違う

ところもあります。というのは、日本で「共同、共同体」というと多くの人々が同じ意見を持っていて、異質性を排除するというニュアンスがあり、特に前近代的な農村社会ではこのような状況が見られました。ところが公共というのは、むしろ個々人が多様で異質であるという多元性は前提としつつ、その下で社会性、共通性、共同性を見いだしていく。そのために人々が語り合う。ハンナ・アーレントという哲学者はそれを「アクション」というわけですが、そのような公共的行為によって、政治における共通の善を議論し、なるべく見出していく。確実な共通善はなかなか見つかるものではないですが、そのプロセスを重視してゆくというのが、公共の考え方です。

私は理念の空間を考えて、垂直（上下の権力性）、水平（対等な平等性）、超越（精神性・倫理性）という3次元で整理しています。日本の公（おおやけ）は垂直的な上下の関係が表すことが多く、「公共」は水平的な関係であり、この新しい「公共」を切り開いていこうというのが公共哲学の基本的発想です。さらに公共の中には倫理性を重視する要素もあり、それは第3の超越的・精神的な軸とも関係しています。私は、垂直的な公の役割を無視するわけではないのですが、それに加えて水平的な公共、そして精神的な公共性といった3次元を統合していく方向を志向しています。

前近代には、公と私が分化していませんでした。学問的には家産制と言われるような行政や国家の類型では、国王やその周辺の人たちが、全てのものを自分たちの家の財産（家産）であるかのごとく使っていました。だから、人々のものも取り上げることができるし、国のものを私的に流用できることになります。これに対して近代というのは、公私が分化し、法律や行政のルールとして、その違いが明確に定められています。

言い換えれば、公的な国家権力は、個人のプライベート（私的）な自由を侵してはならないという人権の擁護が自由主義の展開の中で確立しました。しかし、冒頭で申し上げたような新権威主義は、新家産制あるいは新家産官僚制になることが多く、一度確立した公私の分化が崩れて再び政治の私物化が行われるというのが新家産官僚制の国家です。日本の政治もこういった傾向が再び表

れているのではないかという議論が生じているわけです。

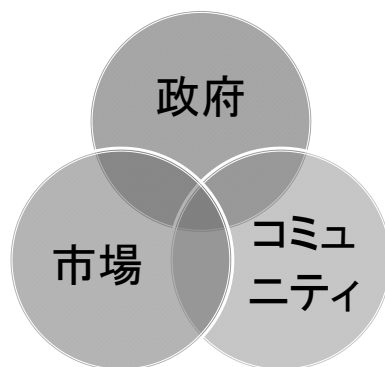
「公私」を媒介する「公共性」

さて、公私の分化に対して私たちは3元論という考え方を提起してきました。公と私が対立し、自由主義は国家に対して個人の人権を擁護するのに対し、その2つがばらばらであるのではなく、その2つを媒介する必要がある。その時に非常に大事な役割を果たすのは、NPOやNGOといったような自発的な結社であり、それは公私を媒介する。なぜならば、こういったグループは民間のグループでありつつ、公共的な役割を果たすからです。

世界的にはソ連崩壊後、日本でも阪神淡路大震災の後から、市民社会という概念が多用されて、このような考え方がしばしば議論されました。そこで大きな論点となっていたのは、「市場における民間企業は市民社会の中に考えて良いのか、そして民間は『私』だけれども、それは公・公共の役割を果たしているのではないか」ということです。私たちはそれに対して、民間企業も公共的な役割を果たし得ると考えていました。ですからボランタリー・グループは当然ですが、企業も含めて市場でも社会的貢献や倫理的投資などを推進していくことが望ましいだろうと考えていて、その後世界でもそういった方向がSDGsなどのかたちで定着してきています。

これに関連する理論として、司会の倉阪秀史先生たちと一緒に行っていた千葉大学のCOE「持続可能な福祉社会の公共研究拠点」というプロジェクトでは、政府・市場・コミュニティという3元論的な構図を提起していました（図1）。後で少しお話しするリパタリアニズムやネオ・リベラリズムという思想は、政府に対して市場経済の自律性（自立性）を重視する。だから規制緩和、民営化を主張し、市場を非常に尊重する考え方です。しかしそれだけではやはりさまざまな問題が生じてくる。やはり政府の役割も一定程度必要ですし、それからコミュニティに注目して活性化していくことも必要です。政治哲学では特に、エッソーニというコミュニタリアニズムの思想家（私は『ネクスト』というこの人の本〔麗澤大学出版会、平成17年〕を監訳しています）がこのようなこ

図1 三元論的構図



出典：以下すべて当日のスライドより。これは21世紀COEプログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」など。

とを言っており、われわれもそういった構図を重視して、その3つのバランスを取るということを強調していました。

「共通善の政治」としてのコミュニタリアニズム

サnderや私が主張しているコミュニタリアニズムとはどういうものなのかということをもう少し立ち入って説明してみたいと思います。「共通善の政治哲学」とも言われています。共通善の実現を政治の課題と考えるからです。政治哲学の類型を、たとえばマイケル・サnderのハーバード白熱教室では、大きく3つないし4つに分けて説明しています。1つ目は福利型と私は呼んでいて、経済的な発想が強く、結果として幸福を最大にすることを目的にします。たとえばGDPを最大化する事を目的とするという発想です。2つ目は、私は自由型と呼んでおり、自由や権利を重視する。その意味では法的発想です。これは「(自由や権利は) 何が何でも守らなければならないものである」という考え方であり、結果をよくしようとする経済的な発想とは違うのです。そして福利型の発想では一部の人々が犠牲になる危険があるので、結果にかかわらず、無条件で自由や権利を守るというのが自由型の発想なのです。

3つ目の発想を美徳型と私は呼んでいますが、自由や権利だけではなくてやはり美徳や善という倫理的な発想も大事だという考え方です。政治においてはこのような発想の影響も強いので、倫理的・政治的発想が美徳型には強いと私は考えています。そして、コミュニタリアニズムはこの3つ目に相当している。1つ目の福利型には、単純な利己主義（エゴイズム）もありますが、哲学の世界では功利主義がこの類型を代表しています。2つ目の考え方が、リベラリズムとリバタリアニズムというふうに2つに分かれて大きく対立しています。先程から言っていたリバタリアニズムというのは、この類型の中で、権利として財産や所有の権利を重視し、それを守ることを強調します。だから市場の重視や効率化につながるし、民営化・規制緩和を主張することになります。他方でリベラリズムと言われる考え方はそれに対して、福祉の権利も重視する。だから再分配、すなわち豊かな人から税金を取って貧しい人に分け与えるということを主張するのがリベラリズムです。2つとも自由型に属するのですが、政策的には大きく対立しています。

3つ目のコミュニタリアニズムはそれらに対して、「善き生」における「善、倫理性・精神性」と、「人々が共に考えて行っていくこと」という2要素を重視します。なぜコミュニタリアニズムと呼ばれるかという点、コミュニティにそういった要素が伝統的にはあったのです。たとえば国民なら国民というコミュニティの共通の善を説明するのが、政治の課題だと考えるのです。

2つ目の自由型の場合は、多様な価値観や世界観の相違は棚上げをして、権利で正義を考えるという発想であるのに対して、何が正しいかを考える時には、価値観や世界観も抜いては語れないので、それらについてしっかりと対話や熟議をして、相互の考え方を理解した上で、最終的には多数決などの方法で決定をする。つまり、「善き生」（価値観・世界観）との関係で正義を考えることになります。そういう考え方がコミュニタリアニズムと言われる考え方です。

コミュニティ・善き生が注目される背景

なぜそういう考え方が勃興したか。かつては社会主義や共産主義が強かった

ので、その中で社会や「共」ということが言われていたわけですが、ソ連圏が崩壊したその中で市場経済ないし資本主義が絶対に正しいという考え方が優勢になりましたが、その反動が生じたのです。市場経済はもちろん大事ではあるけれども、市場だけでは対応できない部分がどんどん侵され、蔑ろにされる状態が生まれました。それに対して「善き生」と「共に」という2要素が再び注目されるようになり、コミュニティの伝統に注目が向きました。

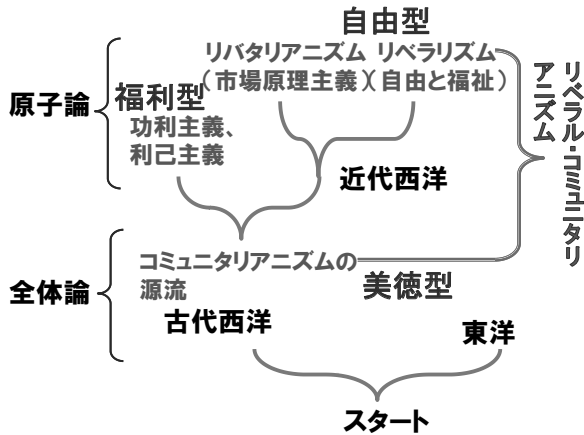
「善」という価値観・世界観は、家族やコミュニティで培われて人格形成に影響を与えますし、コミュニティには助け合いや絆のような「共」という要素があるからです。

もちろんこのコミュニタリアニズムと言われる思想も自由や権利を無視しているわけではなく、近代社会において確立されたそれらは前提とした上で、善（倫理性・精神性）と共（共通性）を重視して、コミュニティの共通善の実現を図ろうと主張するのです。エツィオーニは、「自由・権利」と「責任」の双方を主張し、リベラル派がコミュニタリアニズムを保守主義と批判しているのに対して、それは国家主義・保守主義とは違うと主張しています。そこで、リベラル・コミュニタリアニズムという表現も用いられます。これは、リベラリズムと保守主義の間とも言えるし、近代の原理と古典古代以来の倫理的要素を再び統合するとも説明できるわけです。私の場合はそれを図2でときおり示しています。

古典・古代からスタートしていて、西洋にも東洋にも美徳型があり、これらがコミュニタリアニズムの源流です。上の方に行くと近代西洋の思想で、今お話した福利型（利己主義・功利主義）や自由型（リパタリアニズム・リベラリズム）の考え方が主流になりました。これに対して古典的な考え方も重要であると考えて、その2つを統合しようとするのが、リベラル・コミュニタリアニズムです。

いわゆる左右軸の中で、どの辺に相当するかというと、左の方に社会主義や共産主義、あるいは社会民主主義があって、右の方に国家主義、もっと極端になれば権威主義や全体主義があるわけです（図3）。右の方の思想として中央近

図2



出典：これは、前野隆司氏との対談で前野氏作成の図を小林が改訂したもの。

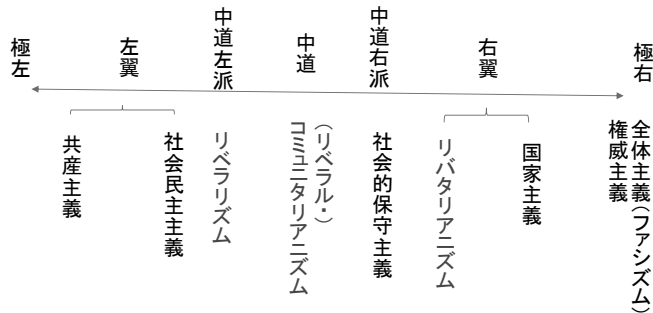
辺ではリバタリアニズム（ネオ・リベラリズム）が重要になってきた。

これに対していわゆる中道的な立場の再構成というところにリベラル・コミュニタリアニズムが登場してきた。リベラリズムもそれに近いわけですが、福祉を重視するという点で、中道左派的な立場です。その反対に中道右派となると、社会的保守主義があります。リベラル・コミュニタリアニズムはこの真ん中に位置すると考えればわかりやすいでしょう。思想家によって位置が若干違うところがあるので、各思想の理論家が必ずこのように位置づけられるというわけではありませんけれども、大きな見取り図としてはこのように考えればいいだろうと思います。

どのレベルのコミュニティか

そして、コミュニタリアニズムにおいては、どのレベルのコミュニティを考えるのがとても重要な問題です。一般的には国民国家における国民というコミュニティを考えます。ナショナリズム全般を批判する思想もありますが、健

図3 左右軸と政治哲学



※コミュニタリアニズムはリベラリズムと社会的保守主義との中間。

全な国民主義（ナショナリズム）も考えられるので、コミュニタリアニズムの思想家の中にもそれを重視する人がいます。他面で、ローカルなコミュニティを重視するというのも、コミュニタリアニズムの非常に重要な特質で、ローカルなコミュニティと地方自治の活性化を強調するわけです。

そしてまた「国境を越えたコミュニティ」という考え方も存在します。その中にはアジアのコミュニティとか、地球的なコミュニティの生成（やそれに基づくグローバル・ガバナンス）を考えていく場合もあります。私自身は、こういった複層的なコミュニタリアニズムを提起していて、国を超えたコミュニティは、今の時点で確立しているわけでは必ずしもなく、EUのような地域コミュニティ、さらには地球的なコミュニティが生成していくという歴史的なスパンの中で考えていくべきだと主張しています。よって時間性も大事で、過去世代・現代世代・将来世代という観点から、コミュニタリアニズムを考えていく。先程言った千葉大 COE プロジェクトは、持続可能性 sustainability を鍵概念としており、公共哲学ではジェネラティヴィティ（生成性）という概念も重視しています。こういった時間的観点を導入したコミュニタリアニズムを私は「生成的コミュニタリアニズム」とか「超世代的コミュニタリアニズム」と呼んでいます。

もうひとつコミュニティとの関係で重要なのは、エコロジーとの関係で、西

洋の哲学では人間のコミュニティを中心に考えるのですが、自然や生物といったエコロジ的なコミュニティの中で考えていくという発想も私は重要だと思っています。「エコロジ的コミュニティアリズム」が複層的コミュニティアリズムの基礎となり、エコロジ的自己やエコロジ的コミュニティ（自然と調和するコミュニティ）という考え方も主張しています。

先程申しましたように、コミュニティアリズムは価値観や世界観も含めて議論するというのを重視していますので、これが対話の重要性ということに繋がってきます。ハーバード白熱教室のような大人数でのソクラテス的対話で注目を浴び、私としてはそのような対話のプロセスが教育や市民社会の様々な領域において展開していくように最善を尽くしています。ここまでが公共についてのお話です。

ポジティブ心理学——「幸福」と「美德」と「公共」の科学的心理学

次に幸福に関するお話をごく簡単にしてみたいと思います。冒頭でお話しましたような、ポジティブ心理学の本を最近私は刊行し、ポジティブ心理学を、幸せと徳・美德、それから公共の3つを軸にして考えています。

先程も言いましたように、コミュニティアリズムが勃興してきているのは、やはりコミュニティが衰退していて、その結果人々がどう生きたらいいかということがわからなくなったり、絆が薄くなってしまったりしているからです。アメリカでもやはり同じような現象が起こっていて、それがたとえば精神的疾患の増大にもなっています。また日本でも孤独死や無縁社会も話題になりました。3・11後の要請としても、やはり人間の心について注目する必要がある。コミュニティアリズムの思想家はそういったことを言っていますけれども、心理学の展開の中から、生き方の問題に取り組むものが現れてきたのです。

マーティン・セリグマンという心理学者が、アメリカの心理学会会長だった時に、20世紀末に、従来の心理学はどちらかというと、精神疾患という病の方に研究の支点を置いていて、そこからの回復を目的としていたけれども、逆に良いポジティブな心理も同じように注目して研究していくべきではないかとい

う問題提起をしました。たとえば樂觀主義とか、快楽、社交性、陽気さ、楽しみ、満足感、希望などにも目を向けてみようというのです。実際にそうしてみたところ、幸福や繁栄という良い状態をもたらす傾向性のある要因が統計的に明らかになってきました。それは良い生き方、善き生としばしば言われます。先程コミュニタリアニズムでも、善き生ということを申しましたが、その場合は思想的に善き生を考えているのに対し、それを科学的に研究する心理学が勃興し始めたわけです。そこで私も興味を持ったのです。

最も有名な古典的な例を挙げてみますと、修道院でアルツハイマー病の調査をさせてもらった研究グループが、180人の修道女が見習い時代に書いた文章を、後に調査しました。修道女になる際の見習い時代に快活な文章を書いている人と陰鬱な文章を書いている人がいて、若いときに最も快活だったグループは85歳の時に90%生存していたのに対し、最も快活でなかったグループでは34%のみ生きていたということがわかりました。この調査がなぜ非常に後に注目をされたか。長い時間をかけた実験は人間については非常にに行にくいし、さまざまな条件をコントロールすることが極めて難しいのです。ところが修道院においては中の人たちが同じような生き方・暮らし方をしていて、病気になれば同じような医療を受けるというように、条件が共通しているので、健康ないし寿命の違いが、若い頃の精神状態によって影響されているのではないかという推論が成り立つのです。そういう条件が存在するために、生存と死亡という健康に関する結果の原因が人間の気持ちにあるのではないかということが推定できたのです。この古典的な研究がひとつのきっかけになって、その後さまざまな研究が行われるようになり、人間の心理状態が健康や寿命を左右する、さらには学業や仕事に影響を与えるということが明らかになってきました。

そういった研究をもっと紹介したいのですが、今日は時間の関係でコミュニタリアニズムや公共性との関係に力点をお話します。セリグマンとクリストファー・ピーターソンという研究者は、美德と人格的強みのリストを作り、その調査を始めました。

さまざまな文化圏における美德や強みを調べてみたところ、図4にあるよう

図4 美徳と人格的強み



な6の美徳とその下の24の強みは世界のさまざまな文化や伝統で重視されていて、これらを生かすことによって、本当の幸福が実現すると考えられるようになったのです。ここでは智恵と知識、勇気、愛と人間性、正義、節制、スピリチュアリティと超越性という6つの美徳が挙げられていますが、たとえば儒教で仁・義・礼・智・信と言われるものと重なっています。

このように、世界中で普遍的な美徳のリストを考えて、さらにそれぞれの美徳の中に24の人格的な強みが位置していると考えられました。精神医学においては、疾患・病についてこのようなリストを考えて、症状と照らし合わせて診断を下していくのですが、逆にポジティブな心理状態にもこのような体系的分類をしようと考えたのです。実際の調査や研究では、このための質問票を使って人格的強みを調べ、自らや研究対象の強みを把握するということが行われています。

ポジティブ心理学と政治哲学

そのような研究が進展するにつれて、アリストテレス的な考え方が注目されるようになってきました。先程、コミュニタリアニズムには思想的に古典的な要素があるというお話をしました。ヨーロッパでは、プラトンやアリストテレスというギリシャの哲学者が古典的な原点であるわけですが、そのアリストテレスという思想家は、幸福は人間の究極的な目的であると考えました。その幸福は、一時的な快楽、利他的な享楽ではなくて、倫理性を持つ善い幸福なのだ

と考えて、ギリシャの言葉でそれをエウダイモニアと呼びました。

それはどういう意味かと言いますと、個々人の魂に存在する資質を発揮して、活動することによってその人固有の幸福が実現していくということです。たとえば音楽家であれば、音楽家の資質を発揮することによって、素晴らしい音楽を行い聴いた人たちが喜びを得る。それは音楽家としてのその人固有の喜びであるわけです。「アリストテレスが言ったエウダイモニアのような幸福は、一時的で過ぎ去ってしまうような快楽の幸福とは違って、前者がより重要な持続的幸福ではないか」という問題提起が、この心理学が発展するとともに、なされていきました。たとえば賭け事をして、宝くじで非常に多くのお金を得ると、短期的には非常に大きな喜びをもたらすということが容易に想像できます。しかし、実際に調査してみたところ、その喜びは持続しなかったりあるいは、中長期的にはそういうものを得ていない人よりも不幸になったりするケースがかなりあったのです。

ですからそのような短期的な快楽、それに基づく幸福ではなく、持続的で長期的な、倫理性を持つような幸福を調べる必要があるのではないかと考えて、それを「エウダイモニア的ウェルビーイング（良好状態）」と呼び、それを計測する調査票が工夫され、それに基づく研究が行われました。このような幸福観は、アリストテレス的な古典的哲学に近く、コミュニタリアニズムが言うような善き生と関係が深くなってくるわけです。

「ウェルビーイング（よい状態）」の5つの次元

先程少しお話をしたセリグマンという代表者は、最近、多次元的理論として、ウェルビーイング理論を主張しています。ウェルビーイングという言葉は、日本語で言えば「よい状態」という意味ですが、幸福というとハッピーという感じで短期的で刹那的なものをイメージしやすいので、科学的な研究では幸福という言葉よりも、ウェルビーイングという言葉を使って、ウェルビーイングのあり方、そしてその度合いを計測しようという議論が最近は多くなっています。

セリグマンはウェルビーイングを5つの次元によって説明しようとしまし

た²。それはポジティブな感情 (P) と没入 (E)、人間関係 (R)、意味 (M)、達成 (A) という5つです。この5つが全部揃わないと幸福ではないということではなくて、それぞれの人には力点がもちろんあり得るわけですが、この5つによってその人の幸福の状態を把握できるという考え方です。そして、美德や個人的な強みが活かされると、この5つが増加して、それによって幸福になる傾向が高まると想定されています。

その中の「ポジティブ感情 (P)」は、先程お話したようなさまざまな明るい感情のことを言います。ポジティブ心理学のスタートの段階で非常に注目を浴びたわけですが、ポジティブ感情を持つということが、健康の改善や病からの回復によい影響をもたらす。そしてまた、ポジティブ感情の比率が一定程度より高い方が、関心の範囲が広がり、知性や精神の働きがよくなるということが、バーバラ・フレドリクソンをはじめとする研究者の実験によって分かりました。日本語では「病は気から」という言葉がありますが、それが科学的な真実に対応していたということが分かったわけです。

次の、活動への「没入・没頭 (E)」は、ミハイ・チクセントミハイという研究者が明らかにしたもので、フロー体験とも言われています。よくスポーツ選手が「ゾーン」に入るという言葉を使うことがありますが、夢中でスポーツなどの活動に集中していると、その時その時に「どういう結果を得たい」という結果は頭から消えて、そのことに成りきって、時間の経つのを忘れてしまうことがあります。その時に、非常に楽しいと同時に創造的な仕事ができたり、素晴らしい記録が出たり、といいことが起こることが多々あるのです。スポーツ、芸術、趣味などさまざまな活動にそういったことがあり、仕事でもそれは可能であるということが分かりました。この時に能力・技術 (技能) と、挑戦の目標という2つが均衡してはじめて、集中してこの「ゾーン」の体験、フローの体験を得やすいのです。これが幸福にとっても大事だと考えられたわけです。

3つ目が「人間関係 (R)」です。当然想像がつくことですが、最も幸福な人々

² 視覚的な図としては、小林正弥「幸福公共哲学とその科学的展開」『公共研究』2016年3月、12頁、第3図参照。

を調べてみると、やはり友人やパートナーとの人間関係が充実していることがわかりました。たとえば朝4時に電話して悩みを打ち明けられる相手がいる人の方が長生きする傾向があるということも分かって、やはり幸せ・幸福にとって人間関係は最も大事なことであったということが、さまざまな研究によって確認されました。

次は「意味 (M)」です。自分の生き甲斐、そして仕事のやり甲斐などの意味。意味を感じているということが、やはり幸福につながっていつているのです。ナチスの強制収容所の中で生き延びた人を見ると、生きる意味というものを自覚していたということが後にフランクルの著作『夜と霧』みすず書房、原著1946年)で分かって、非常にインパクトを与えました。また、仕事においても、報酬のためやキャリアのためと考えて仕事をしているよりも、その仕事を天職として考えている人が多い職場の方がパフォーマンスはよいということが分かりました。やはりこの意味の次元も、とても幸福にとって大事なのです。

次の「達成 (A)」というのは、成功や勝利や富などを達成することです。それが当然幸福をもたらすわけですが、この達成のための達成自体、達成感もやはり幸福にとっては非常に大事だということです。最近、セリグマンの指導を受けたアンジェラ・ダックワースによるグリッドの研究も、大きな注目を集めています。日本語ではグリッドとは気概や気力に近いですが、熱意(熱気)と粘り強さ(根気)というふたつの要件によって、これを計測したのです。すると、グリッドが高い人の方が、運動や学業においても成功するという可能性が高いということがわかって、改めて気概・気力が重視されるようになってきています。

以上、ごく簡単ながらこの新しいポジティブ心理学のイメージをお話しました。先程私が紹介しました拙著の『ポジティブ心理学』では、この中身をもっと細かく広範に説明していますので、ご関心のある方はぜひこちらを読んでいただければありがたいと思います。

公共的幸福のビジョン

では、このポジティブ心理学という新しい心理学が明らかにするウェルビーイング・幸福が、公共哲学の研究する公共性とどういう関係にあるのかということを最後に説明したいと思います。

ポジティブ心理学は、当初は個々人の幸福を実現するための条件を探究しました。もちろん科学で統計的研究によってこういう傾向が出てきたということなので、「こうすれば必ず幸福になる」というものではありません。ただ、そういう状況あるいは条件を持つ人の方が幸福感を持つ可能性が高いということがわかってきたのです。そして、ただ（相関）関係があるだけではなくて、先程修道女研究でご説明したように、因果関係もあることがわかりました。

どういうことかと申しますと、もちろん仕事に成功したり、自分がよい状況だったら幸福であるということは容易に想像できます。だからその2つが関係しているといっても、それだけではそれほど大きなインパクトはないのです。しかし、ポジティブな感情をはじめとする人間の心理が健康や寿命、学業、仕事といったようなパフォーマンスに影響を与えるということになると、大きな意味を持ちます。これらの良い状況は人々が幸福とみなすものに近く、その実現は多くの人が願っていることなので、そのためにどうすればよいかということは人々の大きな関心事です。そこで、「心理→パフォーマンス（幸福）」という因果関係がとても大事になります。それを実験によって明らかにしたために、ポジティブ心理学は非常に注目されました。

しかし、「個人が幸福になるための傾向性は示しているけれども、はたして社会の問題はどうだろうか」という批判も現れました。私が追求してきている公共的な問題はどのようなだろうか、ということが大きな問題になってくるわけです。

「主観的幸福」「美德と強み」そして「制度」

実はポジティブ心理学の中でも、当初から3つの柱というものが言われてい

て、その1つ目は先程お話ししたウェルビーイング、主観的な幸福と言われるものです。

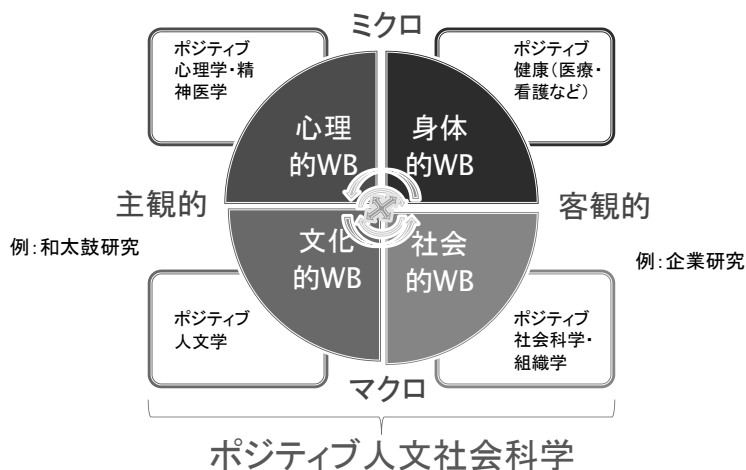
2つ目が先ほどお話しした美德と強みです。3つめは制度という言葉で言われていますが、これは公共的な制度を意味しており、「善き生を可能にするための制度はどういうものなのか」ということです。

その中身を見てみますと、たとえば医療や教育、ビジネス・経済、社会といったものなので、私たちが公共的領域と考えてきたものと重なるわけです。そうはいながら実際の研究では初めの2つの研究領域が発展して、3つめは弱かったのですが、私は特に3つ目の主題に関心を持って、国際ポジティブ心理学会に関わるようになり、その中で新しいフロンティアとしてこのテーマが進み始めています。その中で特に政治との関係について、ポジティブ政治心理学という新しい考え方を私は提起しています。

そういった流れがあるので、最近はポジティブ心理学も心理学という領域だけではなく、包括的な方向に展開しています。特に応用ポジティブ心理学という、ポジティブ心理学の実践的適用についての研究が多様な主題について進んでいます。

図5を見てください。これは、縦軸は「ミクロ／マクロ」、横軸は「主観的／客観的」で、この4象限に分けてポジティブ心理学の展開を示しています。まず「ミクロ／主観的」（第2象限）な心の領域は心理的ウェルビーイングを高めることを目指しています。ここにはもちろんポジティブ心理学そのものがあります。その研究によって開発されたエクササイズやワークによる働きかけをポジティブ介入と言いますが、これは精神的な病や抑鬱にも一定程度効果があることがわかってきました。そこで治療を目的とする精神医学にも影響を与え始めていて、「ポジティブ精神医学」が誕生しました。これも第2象限に入ります。私は日本ポジティブサイコロジイ学会の理事でもあるのですが、この学会の監修で『ポジティブ精神医学』（ディリップ・ジェステ、パートン・パルマー編、大野裕・三村將監訳）という本が刊行され、私も第4章「ポジティブ社会精神医学」を翻訳しました。

図5 包括的ポジティブ学への多領域的転回：ウェルビーイングの好循環



そして、今度は心理だけではなく、身体との関係も注目されています。これが「ミクロ／客観的」（第1象限）な身体領域です。先ほど「病は気から」という話をしましたが、医療や看護の領域で「ポジティブ健康」という考え方が現れています。どういうことかと言いますと、通常は実際に風邪や病気になってはじめて医療機関に行くわけですが、ポジティブ健康という考え方からすると、ただ「病気になる、回復する」というだけではなく、健康のストックがいわば資産としてあるわけです。だから、風邪や病気になっていないとしても、とても生き生きとしてエネルギーがあり、ヴァイタリティがあって、そう簡単には風邪や病気にならないという状態と、一応健康ではあるのだけれどもすぐに弱って風邪をひいてしまう状態とは違う。そこで、そのようなその健康の資を培っていこう、増進させていこうという考え方です。そういった方向性を念頭に置いた医療や看護の展開が身体的ウェルビーイングの流れとして非常に大事なひとつのポイントになってきています。

次に「マクロ」の下半分は、人文社会科学の領域で、ここでの展開も現れています。「マクロ／主観的」（第3象限）な文化の領域では、ポジティブ人文学

(ヒューマニティーズ)という概念が提起されています。詩や文学作品を通じてウェルビーイングを高めることが考えられ、そのための作品を考える研究もあります。音楽や芸術、宗教や倫理にも同様の考え方が現れており、そういったポジティブな宗教や倫理などを考えたり、それによって既存の考え方を補強ないし発展させたりしていこうとしています。これらが推進しようとしているのは、文化的なウェルビーイングです。

また、「マクロ／客観的」(第4象限)なのは社会科学の領域で、社会的ウェルビーイングの向上を目指しています。ポジティブ社会科学という言葉が提案されており、実際にいちばん中心になっているのは、ポジティブ組織学というものです。さまざまな組織が対象ですが、その中で最も研究として展開しているのはやはり企業研究です。ここには、ウェルビーイングを高めていくことで企業のパフォーマンスが上がるのではないかという考え方があり、組織のポジティブな活性化を促す研究が展開しています。

左側の領域に相当するものとして、私は日本ポジティブサイコロジー医学会で依頼を受けて、実際に和太鼓の研究を行いました。実際に和太鼓のエクササイズを高齢者の方々にしてもらい、実際にポジティブ感情をはじめとするウェルビーイングを高めるかどうかを調べたのです。調査の結果、確かにそういう効果があったことが分かりました。たとえば、うつ傾向のある高齢者にも、良い効果がありました。和太鼓は日本だけでなく、最近海外でも注目されますけれども、ウェルビーイングを高める効果が確かにあることがわかりました。日本の文化の中に、いわばポジティブ介入の意味を持つ音楽的エクササイズがあったということになります³。

また、右側の領域に相当するものとしては、私の企業調査においても、やはりウェルビーイングが高い従業員が多い店舗などでは前年比売り上げ増加率が高かったという結果が出ました。特に職場のウェルビーイングよりもむしろ個人の人生におけるウェルビーイングが高い方が、売り上げ増加率というような

³ 小林正弥「和太鼓によるエクササイズ(エクサドン)の効果」『公共研究』第15巻第1号、2019年。

パフォーマンスも高いということが明らかになりました⁴。こういった研究はまだパイロットスタディではありますが、ポジティブ心理学が人文社会科学の方向に影響を与えるという可能性を示すものだということができます。

そして今、選挙とウェルビーイングの関係についても研究をスタートさせていて、ウェルビーイングが選挙に影響を及ぼすのではないかと調べています。「アメリカのトランプ大統領が誕生した2016年選挙では、ウェルビーイングが低い地域の人々がトランプの共和党の方に票を移動させた率が高かった。だからトランプ大統領が誕生するひとつの要因として、ウェルビーイングの低さがあった」という研究結果がアメリカで出されました。そこで日本の参院選挙でもそれを調べ、アメリカのトランプ大統領誕生の選挙ほど顕著ではありませんが、やはりウェルビーイングは選挙結果と関係するということがわかりました。このように人文社会科学の領域でポジティブ心理学が展開する可能性が高まっていて、それを「ポジティブ人文社会科学」と言うことができますと思います。

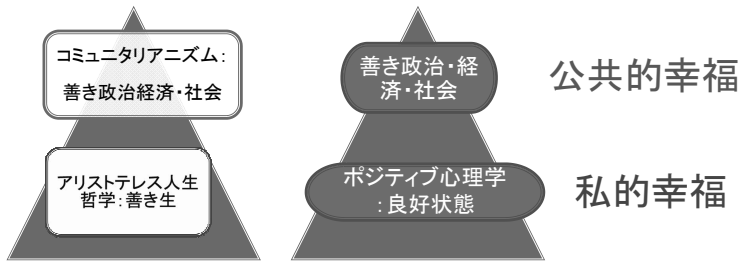
ポジティブ心理学の多領域的展開

つまり心理学だけではなく、こういったさまざまな学問に波及しつつあって、それは「包括的なポジティブ学」への多領域的な展開だと私は考えています。いわばポジティブな総合学へと発展し始めていると言ってもよいでしょう。

こうなってくると哲学と政治哲学の関係と同じような展開を、ポジティブ心理学を起点として考えることができるようになります。初めの方で私がお話ししたように、サンデルや私は、善き政治経済や社会を実現することを目的とするコミュニタリアニズムの政治哲学を提起しているわけですが、思想史的にはその基礎は、古典時代のアリストテレスの人生哲学にあり、「善き生とは何なのか」という問題意識に基づく人生哲学を基礎として、政治哲学を展開していると考えられます（図6）。

⁴ 小林正弥、前掲「ポジティブな動態的公共システム論」、98-102頁。

図6 ポジティブ心理学と公共哲学：私的幸福と公共的幸福



同じように、ポジティブ心理学が科学的な手法で明らかにするウェルビーイング（良好状態）の研究は、はじめプライベートな個人的な幸福の研究が中心だったわけですが、それを政治経済・社会の方向へと展開することによって、公共的な幸福の在り方を科学的にも考察することが可能になると考えているのです。私は、コミュニタリアニズムの講演などをする中で、なかなか若い人には「善き生」という言葉は伝わりにくいと思いました。今日では、科学の影響力が非常に強いので、ポジティブ心理学の科学的成果と思想とを統合的に研究することによって、公共哲学のビジョンをさらに前進させる必要があると考えて、こういった研究を行っているのです。

これはもっと大きく言えば、哲学と科学を架橋することにもつながるのではないかと、と思っています。公共研究は、公共哲学のような思想史研究と実証研究・政策研究の両方を含むものとして、千葉大学の我々のプロジェクトで進められてきていますが、そのような思想と実証の連携をさらに新しく先に進める可能性があるのではないかと思います。近代以来、思想・哲学と科学が分断されていて、思想史研究と科学研究には溝があったわけですが、少なくともポジティブ心理学とコミュニタリアニズムの関係については、それが架橋されつつあると私は考えています。それは近代科学のように価値中立的なものでもなく、科学を無視した規範的な学問でもなく、科学的な成果を踏まえつつ善き生を促進するという点で、実証的・科学的にして促進的な学問と理解することもできるわけです。

理論学・実践学・制作学という学問分類をアリストテレスは提起しましたが、ポジティブ心理学はその中の実践的科学だと私は考えています。ニュートン力学以来の近代科学のイメージのように、厳密な数理的法則によって説明されるという理論的科学というよりも、むしろラフな傾向則が明らかになる実践的科学です。「こういう生き方をすると、こういうふうになる傾向が高い」ということですが、それは人々の生き方の指針になりますし、さらには政策の参考にもなるだろうと考えています。そういった哲学と科学の架橋を考えて、哲学に導かれた科学という意味で、このような学問を「哲学的科学」と呼んでいます。

このようにして、ポジティブ心理学の成果を踏まえて、さらに公共哲学を発展させていくことが可能になるのではないかと考えております。先ほど言った美德や強みの活用、それに基づくエクササイズやワークは、ポジティブ心理学の軸になっているわけですが、その「善い生き方」を念頭に置きながら、「それをどういうふう to 実際の社会においてより多くの人々が行えるようにするのか」、あるいは「そういう人々が多くなるとどのような社会が実現していくのか」といったことを公共哲学の課題として考究していくことができるだろうと思います。それは大きく言えば、アリストテレス的な公共哲学が科学的なかたちでさらに前進していくことになるだろうと私は思っています。よって、先ほどのアリストテレス的なウェルビーイング、エウダイモニア的なウェルビーイングという考え方がこの点で重要だと考えております。

先ほど幸福という言葉には非常に多くの意味があって、単純な利他的な快楽を幸福と思う人も多いので、それと区別してウェルビーイングという用語を科学的に使うようになったと言いましたが、最近『フローリッシュ (Flourish)』という本をセリグマンが書いてから、この言葉もよく使われています。この言葉の語源は「花」(英語では flower) や「開花」と関係しますから、アリストテレス的な思想からすれば、「人間のその人の素質や才能が開花して、幸福になる。発展して繁栄する」という意味をこの用語に含ませて使うことができるでしょう。繁栄という言葉も含まれています。だから私はそれを開花の幸福、繁栄の幸福という意味で、開福とか栄福とも訳しています。

ポジティブ公共哲学の可能性

公共哲学との関係に戻って改めて考えますと、実は公共哲学の中でコミュニタリアニズムは、ポジティブな公共哲学と位置づけることができるでしょう。なぜならば、リベラリズムやリバタリアニズムという自由型の政治哲学は、基本的には「国家権力が悪用されて個人の人権を侵害することはネガティブな悪い事柄なので、そこから守る、防止するということが最も重要な問題だ」と考えています。これが自由型のいちばん基本的な問題意識です。たとえば憲法上の自由・人権、そして立憲主義——これらは今日の日本の政治の大きな課題でもあります、ネガティブな事柄の防止という目的を持っているわけです。

先ほどリベラル・コミュニタリアニズムという表現を説明しましたが、コミュニタリアニズムも自由主義は重要であると考えていて、その基礎の上にさらにプラスしてコミュニタリアニズム独自の主張をしています。なぜかという、コミュニタリアニズムの目的というのは、先ほどお話しした共通の善、あるいは公共の善を実現するということで、これはポジティブな目標だからです。従来の政治哲学、特に自由型の政治哲学はネガティブなことが起きることを防止すること、それをやめさせることに主眼があった。それは、元々の心理学が追求していた「病をどう治すか、どう防ぐか」という問題意識と共通しています。それに対して「より健康に、より幸福に」というのは、ポジティブな方向です。コミュニタリアニズムはまさにそれを課題としていた政治哲学です。そこでリベラル・コミュニタリアニズムという言葉は、「一方でネガティブなことを防止するという趣旨をリベラルという言葉で表現し、ポジティブなことを実現するという趣旨をコミュニタリアニズムという言葉で表現している」というふうに私としては考えています。

そしてポジティブ心理学の基礎の上に立脚するポジティブ人文社会科学は、ポジティブ公共哲学と極めて近いことになるでしょう。個々人のポジティブな心理がポジティブな組織、ポジティブな社会につながっていき、それが社会全体の幸福・栄福を高めるという可能性を追求するわけです。

それは科学であるがゆえに、計測が大事です。ウェルビーイングを計測したうえで、政策に反映させるという可能性を追求するわけです。ポジティブ心理学や幸福研究の代表者たち（セリグマンやエド・ディーナー）は、国家的な規模でウェルビーイングを計測することを提案していて、既に国連では世界幸福報告が毎年出されていますし、イギリスをはじめとするいくつかの国々では独自にウェルビーイング指標を作って、調べることも開始しています。そういったことが継続的に行われれば、幸福を増進させるための政策、つまり幸福公共政策を立案することが可能になるでしょう。こうしてポジティブな政治あるいは政治経済のビジョンが改めて生まれてくるのではないかと思います。

今日の社会においては、望ましい方向がなかなか分かりません。今特にコロナ禍にあって、非常に大変な危機的状况ですから問題ばかりが目に見えます。思想を考えてみても、何が今後追求すべき理想かということは、そう簡単には分かりませんが、それを提起しているのが公共哲学やコミュニタリアニズムであるわけであり、さらに科学との架橋によって、「哲学的にして科学的なポジティブな政治経済のビジョンを提起することが可能になるのではないか」と私は考えています。

福祉政策への展開

一般には福祉という言葉には、貧困や不衛生、病気などのネガティブな現象への対処策という意味が強いのですが、もともとの福祉という言葉の原義は、日本語でも英語でも幸福ということなのです。そこで「ポジティブ福祉」（アンソニー・ギデンズ）という概念を展開して、よりポジティブに幸福あるいはウェルビーイングを実現していくための積極的な政策を追求していくということが、可能になるのではないかと考えています。「善き仕事」やその就労を可能にするポジティブな支援策は、その例です。

今は福祉国家が行き詰まったと考えられていて、福祉政策に関しては削減などの暗い話が多いわけですが、こういった人間の精神面に目を向けて、福祉政策の新しい展開を考えることが大事です。先ほど言った COE プロジェクトの

リーダーは、京都大学に移られた広井良典先生だったのですが、その広井先生が編集された『福祉の哲学とは何か』（ミネルヴァ書房、2017年）という本で、「幸福公共政策としての福祉」という考え方が提起されており、私は第2章「福祉哲学の新しい公共的ビジョン」を執筆しています。こういったポジティブな政治を実現するために、ポジティブ政治心理学の可能性を私は国際ポジティブ心理学会で提起しました。冒頭で世界の今のリーダーたちにさまざまな問題があるとお話ししましたが、では、「どういう人格の政治家・リーダーが望ましいリーダーであって、どうやってポジティブな政治を実現していくのか」ということを研究していくというのが、その趣旨です。

今日は時間の関係で詳しくお話できませんが、このように、コミュニティアニズムやポジティブ心理学の展開に基づいて、新しい政治経済や福祉国家のビジョンを考えています。たとえば、「善き生」を可能にするポジティブ福祉国家、正義に即した税と福祉による公共的幸福の増進といったような方向です。

そのための理論として、私は最近、ポジティブな公共システム論を提起しました⁵。先ほど政治・経済・コミュニティという三元論のモデルをご紹介しましたが、それをさらに発展させたものです。図でいくつか重なっている丸の外側の方は、地域的コミュニティや国民的コミュニティ、地球的コミュニティというコミュニティです。これが基礎にあると私は考えています。先ほどの3元論のモデルではコミュニティが3つの内のひとつでしたが、このモデルではコミュニティが全体の基礎にあると考えられているので、さらにその重要性が高まっています。もっともコミュニティというどうしても閉鎖的な共同体のイメージが強くなるので、タルコット・パーソンズという社会学者の晩年の概念を使って、これを社会コミュニティと呼んでいます。その社会コミュニティは、ローカル・ナショナル・グローバルというように複層的にあります。そのもとで、3つのサブ・システムが存在する。それは政治のシステムと、経済のシステムと文化のシステムです。その3つのシステムの相互作用があって、その中

⁵ 視覚的な図は、小林正弥「ポジティブな動態的公共システム論」『公共研究』第16巻第1号、96頁、第11図参照。

核に人間システムがあります。そして、公共的領域では政治・経済・文化という3システムがそれぞれダイナミックに発展する。さきほどの政治・経済・コミュニティという3元論と似ていますが、コミュニティが全体の基礎と考えるようになった一方で、その代わりに文化システムを政治・経済システムと並列させて、3システムを考えています。そして、社会コミュニティ、政治、経済、文化それぞれについてウェルビーイングが考えられます(政治的ウェルビーイングなど)。そして社会コミュニティが自然の中にあり、自然についてはエコロジックなウェルビーイングが考えられる。これらのいずれも計測していくことを追求していくべきではないかというのが私の考え方です。それを私は多次的・多層的ウェルビーイングというふうに言っています。

マイアミ大学のアイザック・プリレルテンスキーという心理学者を千葉大学に招聘してセミナーを行い、その内容を『公共研究』第14巻第1号(2018年)に載せましたが、彼が提起しているのは、個人だけではなく心身、個人間、コミュニティ、組織、そして経済といった様々な次元におけるウェルビーイングを計測していこうという考え方です。そういったものを手掛かりにしながら、さきほど述べたようなポジティブな公共システム論を考えました。ここからは、「さまざまな領域や次元のサブ・システムが相互により影響を与え合って好循環が実現し多次的なウェルビーイングが高まっていく」という社会のビジョンが生まれてくると思います。それを追究し、それを可能にするような公共政策の在り方を考えることが、今後の新しい理想ではないか、と私は思っています。

コロナ禍における大学のデジタル講義

今日は時間もないので、最後にごく簡単に、こういった観点を念頭に置きつつ、今年の千葉大学のデジタル講義でこういったテーマを扱ったかということをお少しだけご紹介します。今コロナ問題でサンデルの白熱教室のような問題提起をするならば、その中心は「経済か、生命・健康か」というジレンマです。こういったジレンマを局面に応じてさまざまなかたちで学生に考えてもらいました。もちろん他のさまざまなジレンマもあって、毎回コロナ問題をめぐるさま

ざまなモラルジレンマを提起して、学生たちにイエスかノーか問い、投票してもらったうえで意見を投稿してもらい、次の講義で私が整理して先に進めていきました。

社会契約論を提起して今日の憲法の基礎になっているジョン・ロックの思想からすれば、生命・自由・財産を守るために政府が設立されます。このいちばん中心の生命の問題が今問われているわけです。先ほどお話しした功利主義やリベタリアニズムでは、経済の方が大事だという意見が出てくる可能性があって、現に学生の中にもそういう意見を書く学生が相当多いです。経済があつてはじめて生きていくことができるという考え方です。

これに対してリベラリズムの立場では、生命の尊重を重視する意見が多いです。「人権が大事なのでコロナ対策が大事だ」という意見を書く学生もいました。そしてコミュニタリアニズムから見ますと、やはり生命や健康は公共善なので、これらを優先するという考え方がまず出されます。

もっとも経済の発展も公共善なので、コミュニタリアニズムではこれを見捨てるわけではありません。人々の幸福（ウェルビーイング）を増進する公共善として、経済回復・再生も目的に入れて考えるという点では、義務論よりも経済への配慮が考慮され、この点では功利主義とも類似性があります。

つまり、義務論の場合は、「経済か生命か」というジレンマに対して、人権の観点から生命を絶対視して優先するわけですが、コミュニタリアニズムの場合は公共善、つまり公共的なウェルビーイングの増進という観点から優先順位をつけて選択するということになるわけです。ロックの思想を援用して述べたように、生命・自由・財産が大事なのですが、コロナ問題はこの中でも優先順位を考えなければならないという点で、深刻なジレンマを提起しています。この中の優先順位を考えるという論点は管見の限りではこれまで本格的に学問的に論じられていないと思うのですが、私は、生命がもっとも優先し、自由がその次で、財産がその次という優先順位を考えるべきだと思います。たとえばロックダウンや、緊急事態宣言下の外出や営業の自粛においては、生命・健康のために自由や財産（経済）を一時的に制限するということが必要になります。こ

のような観点から、コミュニタリアニズムでは生命という公共善を優先するわけです。

結果的にはどうだったでしょうか。ここでは詳しくは説明できませんが、学生に対しては時間の経過の中で、その時々さまざまなデータを示しながら考えてもらいました。4月の段階で千葉大学大学院薬学研究院および医学研究院の研究グループは、「西洋の国々で陽性率が7%未満の国では、陽性率がそれ以上の国に比べて1日の死亡者の割合が15%でしかないとの解析結果」⁶を発表し、十分なPCR検査を実施した国では、陽性率が低く、コロナウィルスの死亡率が低いので、PCR検査能力の拡大を急務と指摘していました。7月・8月の段階では、コロナウィルスでの人口比死亡率が低いほど、GDPの減少率が少ないという証拠が存在し、他にも、コロナの感染制御と経済的ダメージの関係については世界のさまざまなグループが研究成果を発表していたわけです(図7~9)。

こういったものを振り返ってみると、既に4月の時点で検査数拡大の必要性も言われていましたし、7月から8月のデータで、「経済のために人口比の新規感染者数・死亡者数を最大限抑制することが必要だ」という議論が実証的に行われていました。よって、遅くとも10月には感染を制御できないと経済的にもダメージが大きくなるという研究結果が明らかになっていたわけです。私から見ると、ウィズコロナといって、コロナの蔓延を許容する政策というのは愚策であり、結果的には生命と経済の双方を損なったという点で、政治的な責任が生じるだろうと思います。これを思想的に総括すると、当初の段階では、先ほど言ったように功利主義的な経済優先論と、義務論的な自由型(特にリベリズム)の生命優先論が対立していました。しかし結果的には、データによって、やはり功利主義には不十分な部分があって、このジレンマに関しては義務論的な生命優先論が正しかったと判明したわけです。これは結果としては経済

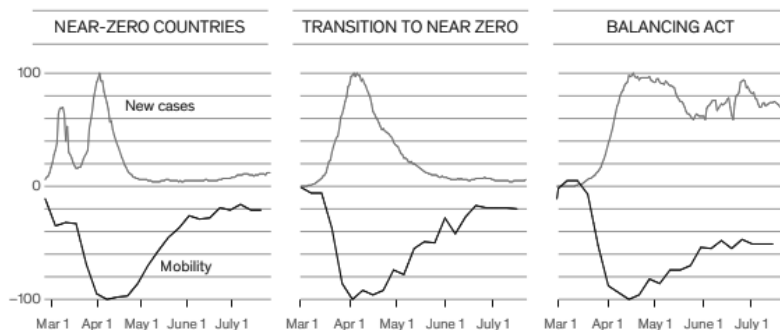
⁶ 千葉大学のニュースリリース「十分なPCR検査の実施国では新型コロナの死亡率が低い——死亡者数からは、西洋とアジアでは感染の広がり100倍違う」2020年4月21日。

図 7

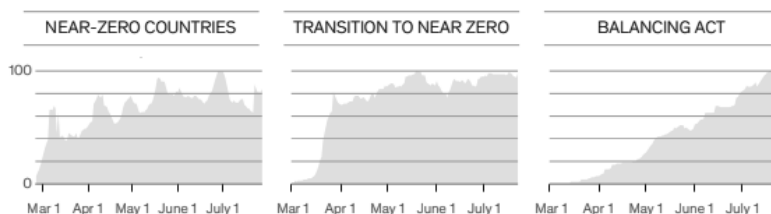
Exhibit 4

Near-zero and transition acts have been successful in getting the virus under control and restoring economic activity.

Discretionary mobility and new COVID-19 cases reported,¹ by average of representative countries, index (0 = pre-COVID level of activity = 0) (100 = post-COVID peak/trough)²



Tests per thousand people,³ index (0 = pre-COVID level of activity = 0) (100 = post-COVID peak)



¹Consumer activity in retail and entertainment, groceries and pharmacies, transit stations, and workplaces. Activity related to parks and home movement is excluded.

²New cases reported and mobility data: weekly through July 25.

³Tests per thousand: daily data through July 25.

Source: COVID-19 Community Mobility Reports, google.com; national health agencies

注：左：新規感染者数ゼロに近い国、中央：新規感染者ほぼゼロに移行した国、右：均衡を取った国（患者数をヘルスケアシステムのキャパシティ以内に抑えようとして、感染者数の上昇をやむを得ないとした国）

上図：上の曲線－新規感染者数、下の曲線－流動性（商業活動）

下図：人口比検査数

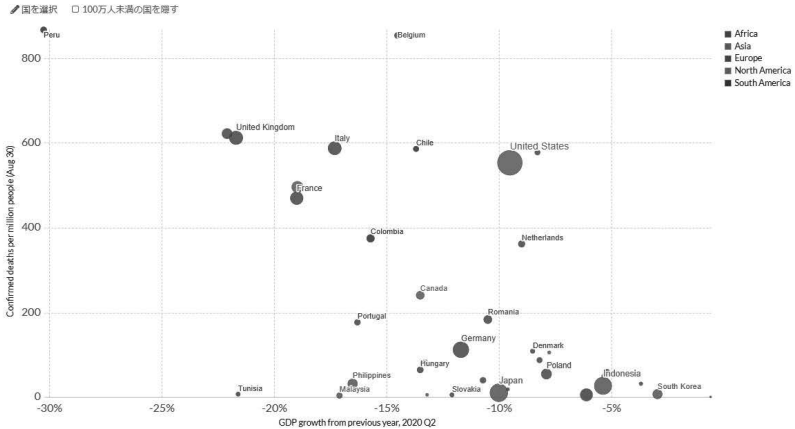
出典：McKinsey & Company COVID－19：Saving thousands of lives and trillions in livelihoods

<https://www.mckinsey.com/~media/McKinsey/Industries/Healthcare%20Systems%20and%20Services/Our%20Insights/COVID%2019%20Saving%20thousands%20of%20lives%20and%20trillions%20in%20livelihoods/COVID-19-Saving-thousands-of-lives-and-trillions-in-livelihoods-VF4.pdf>

図8

2020年第2四半期の経済的衰退とCOVID-19による確認された死亡率

縦軸は、8月30日現在の100万人あたりのCOVID-19死亡数を表示しています。横軸は、2019年の同じ四半期に対するGDPの減少率を表示しています。これはインフレ調整済みです。

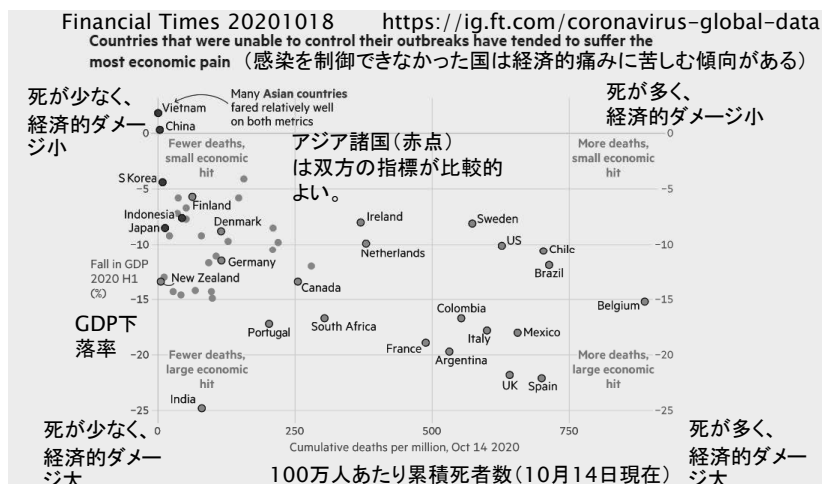


出典：WHO/CDC、Eurostat、OECDおよび個々の国家統計局
注：図中の黒点に横軸に属する国を対照として、確認された死亡数がCOVID-19による実際の死亡数の正確な数ではない可能性があることを意味します。中国の最良後退の時期が早いことを考えると、中国のデータは示されていないかもしれません。国は第1四半期にチャート
CC BY
解説：パンデミックで健康と経済の両方を保護している国はどれですか？ 図

注：縦軸：人口比死亡数、横軸：GDP 減少率。死亡率が低いほど GDP 減少率が少ないという相関が存在。

出典：<https://ourworldindata.org/grapher/q2-gdp-growth-vs-confirmed-deaths-due-to-covid-19-per-million-people?tab=chart&stackMode=absolute&country=®ion=World>

図9



注：100万人あたり累積死者数（2020年10月14日現在）

感染を制御できなかった国は経済的痛みを苦む傾向がある。

出典：Financial Times 20201018 <https://ig.ft.com/coronavirus-global-data/>

表1 ポストコロナ時代への大転換

	原理	科学技術	働き方	生き方	社会・政治
従来	利益・経済	重厚長大	垂直性・画一的	快楽	リベタリアニズム
コロナ後	生命・健康 (自然環境)	デジタル (ネット・AI)	水平性・多様	善福・精神性 (美德・強み)	コミュニタリアニズム (公共性)

の回復・再生にもつながっていくわけですから、実は感染症対策を徹底した方が功利主義的にも正しかったことになります。

そうなるとコミュニタリアニズムが公共善としてやはり感染症対策が大事だという生命尊重論を主張するということは、結果的な公共善として経済の立ち

直りにもつながっていく議論だったと言えるでしょう。私としては、この点で、コロナ問題の上記のジレンマにおいて、コミュニタリアニズムの公共善の議論は、生命尊重という点で義務論的生命優先論と共通しつつ、それが経済回復という人々の幸福（ウェルビーイング）の増進にもつながったという点で、正しかったと考えています。

今回、サブタイトルが「コロナ後の社会を展望しつつ」となっていますが、こういう時代の経験を最大限思想的に昇華させて、今後の現実の政治経済に活かしていくことが大事ではないか、と思います。同じような問題を繰り返さないために、表1で、従来とコロナ後の社会の考え方の相違を「原理、科学技術、働き方、生き方、社会・政治」について要約的に示してみました。これは、今後の変化を予想するものであるとともに、「このような変化が生じないと私たちはこのような危機を乗り越えられない」という規範的な整理でもあります。

従来は利益・経済中心の原理が強かったのに対し、コロナ後は、生命や健康、さらに自然環境の重要性を改めて政策の起点に置くという原理が必要になるでしょう。科学技術では、従来、重厚長大型が中心だったのに対して、まさにいまテレワークなどのデジタル（ネット・AI）が重要になり、この傾向はコロナ後にも引き継がれるでしょう。働き方もそれに伴って、これまでの上下の垂直的な命令系統に基づく画一的な働き方に対して、水平的で多様な考え方・働き方が広がっていくでしょう。生き方についても、今、緊急事態宣言の下でさまざまな制約が加えられていて、快楽中心の生き方は難しくなっており、自分の価値観・世界観を見直す機縁になった人もいます。このような経験は今後、美德や強みなどの精神性を重視して活かすような生き方に代わっていく契機になるかもしれません。さきほどアリストテレスのエウダイモニアという幸福観について述べましたが、私はそれを「善き幸福（善福）」と訳しています。社会や政治においては、先ほど冒頭で言いましたようにリバタリアニズム的な指導者はコロナ対策で失敗したことが明らかになってきていて、現にアメリカでも政権交代が起きました。今後は、コミュニタリアニズムのような公共性を重視する思想が興隆していくのではないかと期待しています。ポジティブ心理学の

言葉で言えば「公共的なウェルビーイングを高めていく政策を打ち出すような政治が今後の世界の新しい軸になっていくのではないか」と私は展望しています。時間の関係でコロナ問題に関しては簡単にお話しましたが、皆さんの方からご質問などがあれば、説明を補いたいと思います。

(こばやし まさや)